

### 第 4 問

【解答】

問 1

|     | 借 方     |           | 貸 方     |           |
|-----|---------|-----------|---------|-----------|
|     | 借 方 科 目 | 金 額       | 貸 方 科 目 | 金 額       |
| (1) | 材 料     | 1,152,000 | 買 掛 金   | 1,152,000 |
| (2) | 仕 掛 品   | 864,000   | 材 料     | 864,000   |
| (3) | 価 格 差 異 | 60,000    | 材 料     | 96,000    |
|     | 数 量 差 異 | 36,000    |         |           |

問 2

月次損益計算書 (一部)

(単位：円)

|                 |               |               |
|-----------------|---------------|---------------|
| I 売 上 高         |               | ( 1,500,000 ) |
| II 売 上 原 価      |               |               |
| 当 月 製 品 製 造 原 価 | ( 1,404,000 ) |               |
| 月 末 製 品 棚 卸 高   | ( 234,000 )   |               |
| 標 準 売 上 原 価     | ( 1,170,000 ) |               |
| 原 価 差 異         | ( 180,000 )   | ( 1,350,000 ) |
| 売 上 総 利 益       |               | ( 150,000 )   |

【解説】

問 1

(1) 材料購入に関する仕訳

実際の購入単価で材料勘定の記入を行っているため、材料の金額は次のように計算する。

$$900 \text{ kg} \times 1,280 \text{ 円 (実際購入単価)} = 1,152,000 \text{ 円}$$

新版日商簿記テキスト工業簿記 p.34 参照

(2) 直接材料の消費に関する仕訳

シングル・プランで勘定記入する際は、各費目別の勘定の貸方と仕掛品勘定の借方は標準原価で記入することになり、原価差異は各費目別の勘定で把握する。したがって、材料勘定および仕掛品勘定の金額は次のように計算する。

$$360 \text{ 個} \times 2,400 \text{ 円 (製品 X1 個当たりの標準直接材料費)} = 864,000 \text{ 円}$$

新版日商簿記テキスト工業簿記 p.201～p.203 参照

(3) 直接材料費差異に関する仕訳

$$\text{直接材料費差異} : \frac{(750 \text{ kg} \times 1,280 \text{ 円})}{\text{実際直接材料費}} - \frac{(360 \text{ 個} \times 2,400 \text{ 円})}{\text{標準直接材料費}} = -96,000 \text{ 円 (借方差異)}$$

$$\text{価格差異} : (1,200 \text{ 円} - 1,280 \text{ 円}) \times 750 \text{ kg} = -60,000 \text{ 円 (借方差異)}$$

$$\text{数量差異} : (720 \text{ kg}^{\ast} - 750 \text{ kg}) \times 1,200 \text{ 円} = -36,000 \text{ 円 (借方差異)}$$

※標準消費数量 : 360 個 × 2 kg

|         |                                     |  |
|---------|-------------------------------------|--|
| 1,280 円 | 価格差異 : (1,200 円 - 1,280 円) × 750 kg |  |
| 1,200 円 | 標準直接材料費 : 720 kg × 1,200 円          | 数量差異<br>(720 kg - 750 kg)<br>× 1,200 円 |
|         | 720 kg                              | 750 kg                                 |

新版日商簿記テキスト工業簿記 p.193～p.194 参照

問 2

損益計算書の各項目の金額は、次のように計算する。

①売上高 : 300 個 × 5,000 円/個 = 1,500,000 円

②当月製品製造原価 : 360 個 (完成品数量) × 3,900 円 (製品 X1 個当たりの標準原価) = 1,404,000 円

③月末製品棚卸高 : 60 個 (月末製品) × 3,900 円 = 234,000 円

④標準売上原価 : 1,404,000 円 - 234,000 円 = 1,170,000 円

⑤原価差異 : 84,000 円 (加工費差異) + 60,000 円 (価格差異) + 36,000 円 (数量差異) = 180,000 円

原価差異は、いずれも借方差異であるため、合計したうえで標準売上原価に加算し、  
実際売上原価 (1,350,000 円) を算定する。

⑥売上総利益 : 1,500,000 円 - 1,350,000 円 (実際売上原価) = 150,000 円

新版日商簿記テキスト工業簿記 p.204～p.205 参照

第 5 問

【解答】

|                             |            |   |
|-----------------------------|------------|---|
| 月 末 仕 掛 品 原 価 =             | 280,000    | 円 |
| 完 成 品 総 合 原 価 =             | 13,500,000 | 円 |
| 等 級 製 品 A の 完 成 品 総 合 原 価 = | 6,000,000  | 円 |
| 等 級 製 品 B の 完 成 品 総 合 原 価 = | 4,500,000  | 円 |
| 等 級 製 品 C の 完 成 品 総 合 原 価 = | 3,000,000  | 円 |

【解説】

(1) 完成品総合原価の計算

生産データを直接材料費と加工費に分けて整理すると、次のとおりである。

| 直接材料費 |       |    |       | 加工費 |                   |    |                   |
|-------|-------|----|-------|-----|-------------------|----|-------------------|
| 月初    | 400   |    |       | 月初  | 100 <sup>1)</sup> |    |                   |
|       |       | 完成 | 6,000 |     |                   | 完成 | 6,000             |
|       |       | 仕損 | 600   |     |                   | 仕損 | 600 <sup>2)</sup> |
| 当 月   | 6,400 |    | 月末    | 当 月 | 6,600             |    | 100 <sup>3)</sup> |

1) 400 個 × 0.25    2) 600 個 × 1.0    3) 200 個 × 0.5

原価投入額の配分方法は先入先出法であるから、月末仕掛品原価は当月製造費用のみから計算する。また、正常仕損の発生点が終点であるため、正常仕損費は完成品のみの負担となる。この場合、月末仕掛品原価の計算においては、当月投入数量から仕損数量を差し引かない。これにより、月末仕掛品原価および完成品総合原価は、次のように計算する。

$$\text{直接材料費の月末仕掛品原価} : \frac{5,120,000\text{円}}{6,400\text{個}} \times 200\text{個} = 160,000\text{円}$$

$$\text{加 工 費 の 月 末 仕 掛 品 原 価} : \frac{7,920,000\text{円}}{6,600\text{個}} \times 100\text{個} = \underline{120,000\text{円}}$$

合 計 280,000円

直接材料費の完成品総合原価：(560,000 円+5,120,000 円) -160,000 円= 5,520,000 円

加工費の完成品総合原価：(180,000 円+7,920,000 円) -120,000 円= 7,980,000 円

合計 13,500,000 円

(2) 各等級製品の総合原価の計算

完成品総合原価 (13,500,000 円) を各等級製品に積数 (完成品数量×等価係数) の比で按分する。

①積数の計算

等級製品A：4,000 個×200 g =800,000

等級製品B：1,500 個×400 g =600,000

等級製品C： 500 個×800 g =400,000

②完成品総合原価の按分計算

等級製品A：
$$\frac{13,500,000\text{円}}{800,000 + 600,000 + 400,000} \times 800,000 = 6,000,000\text{円}$$

等級製品B：
$$\frac{13,500,000\text{円}}{800,000 + 600,000 + 400,000} \times 600,000 = 4,500,000\text{円}$$

等級製品C：
$$\frac{13,500,000\text{円}}{800,000 + 600,000 + 400,000} \times 400,000 = 3,000,000\text{円}$$

新版日商簿記テキスト工業簿記 p.147～p.149 参照

新版日商簿記テキスト工業簿記 p.162～p.164 参照